

したが、エウジニアは爲様のない女で、幾ら亭主が儲けて來ても直ぐ借金させるやうな事許りするの。でも其のお金を女房が奈何して了ふんだか分らないんでせう。悪口家の話ちやあ色男に注込むんだらうなんて言つてましたけど……。標致の美くない女だつたから這廢事を言はれたのかも知れないわね。姉は奈何いふ處からか此のエウジニアと戀意にして、ルイジに佛蘭西語を教はるんだと言つちや、暇さへあれば階下へ降りて行つてたんです。お母さんはそれが氣に喰はない。それと言ふのがアンジュリニの姉妹達が邪魔入れるからですよ。皆揃つて老嬢で、セルジの家の人達とは親密らしく見せかけて居ながら、眞箇は毛唐のやうに嫌つて、悪口を言つちや楽しんでるんですもの。「那廢莫連の宅へアドリアアナさんを出這入りさせとくなんて。」と言つた調子なの。で、だんだん嚴しくなる許り。でもエウジニアは克くジッリオとアドリアアナとの戀の取持ちをして遣つたわ。ジッリオは折々ミラノから羅馬へ用達しに出掛けて來たので、或る時丁度時

刻を見計らつて、姉がとぼくさ降りて行かうとしたんです。母は姉に出ちや不可いつて然言ふんです。姉は又何でもと言ふ。言ひ合つてる内に母は拳を振冠る。二人は頭髮を掴んで揉合ふ。姉は到頭母の腕に嚙附いて、梯子段を駆けて降りたの。然うやつてセルジの扉を丁々やつて居る背後から、母が折重なつて、其處の廣場で大修羅場が始まつて……何時までだつて忘れられはしませんわ。アドリアアナは蟲の息で引摺つて來られましたの。それからどつと牀に就いて、痙攣が罷まない。母も後悔して介抱に手を盡しましたが、それから打つて變つて優しくなりました。……と、二三日経つて病氣が尙だ癒らないのに、アドリアアナはジッリオと駈落した……その話は確か前にお話したと思ひますの。」

斯うした有りの儘の雜談が愚俗な追想と見られて、戀人の上に起る反應には、彼女は全て無食著であつた。聽て復た食事を始めた。少時沈黙があつた。良有つて彼女は微笑みながら言葉を續けて、

「何處まで可憐い母だつていふ事、大抵お解りてせう。貴郎の御存じない、そして私が甚麼に窘められたか想像も附かないのは……あの人の間に喧嘩の始まつた時です。ああ思ひ出しても竦とする。」

少時は静と考へ込んだ。

ジョルジオは憎みと嫉みとの籠つた眼附で、輕はずみな女を凝視めた。その刹那に過去二年の間の苦悶が出て來た。女が何の氣無しに聽かせた言葉を集めて、彼女の前半生を組立てて見た。非常に下卑た色をその生活に帯びしめて穢らはしい境涯まで引き墜して見た。——姉の結婚が那樣花風病者のお庇で出來たとすれば、イッポリータ自身は、甚麼事情と境遇の間で結婚を済ますことが出來たのだらう。年頃の時分に通つて來た社會は甚麼ものだつたらう。甚麼苦に係けられて、那の可忌しい男の手に落ちて、苗字まで改へるやうになつたのだらう。——舊羅馬の中流社會に見る、みじめな、しみつたれた生活を心に描いて見た。其處から立騰る庖廚の臭氣と

聖器所の徹とが入れ雜つて、家と宗教とを一緒に腐爛させて居る。アルフォソ、ン、オ、エ、キ、ジ、リ、の預言が思ひ出されて來た。「君の後釜は誰だか見當が附いてるか。い。モンチと言つて、カムバニアの牙商さ。那で金は有る。」打算的の戀と見れば、イッポリータが然うなつて行くのは、當前の事とも思へる。それには家族の方でも異議のあらう筈はない。樂な生活が出來て、苦勞が無くなつて、以前のやうに正式に娘を結婚させて置くよりは、甚麼にか有福になられるのだもの。「俺自身にそれと同じ條件を附けて、那樣位置を授けてやると、露骨に言出して見たら、奈何だらう。曩日も彼女が、此の冬なり、將來の事に就いて考へてることがあると言つた。事に由ると旨く纏まるかも知れない。這箇の申し出を眞面目に受けて、其の位置が手堅いとさへ見れば、有繋の鬼婆も尻輕な婿よりは俺の方を有難がつて、あんまり可厭な顔もしなからう。結局幸福な家庭が出來て、最後の日迄續いて行ける……。」斯うした「譏刺」に彼の胸は堪らぬ程酷く突裂かれた。自暴に又一杯手酌で

喝と呷つた。

「奈何して今夜は那様に召上るの。」とイッポリイタが男の眼を凝視めながら訊いた。

「奈何も渴く。お前飲まないぢやないか。」

イッポリイタの酒杯は空いて居る。

「お飲んな。」とジェルジオが言つて酒を注ぎさうにした。

「あら。私の方が好いの毎もの通り。孰の御酒も駄目、シャンパンでなくつちや……。曩日アルバノでほら罎の口が抜けないつて、那のパンクラチオが泣きつ面してコルク抜きを引張つたわね。」

「二三本尙だ階下の函にあつた筈だ。見て来よう。」

然う言つてジェルジオは衝と起上つた。

「可いの、可いの。今夜は可いのよ。」

と言つて彼を引留めようとした。が已う降りて行きさうなので、

「ぢや私も。」

燥いだ軽い心持で、男と連れて階下の物置になつて居る室へ降りて行つた。

カンヂアはラムブを提げて追掛けて来た。彼等は函の底から銀の頸の附いた、残りの罎を二本捜し出した。

「有つてよ。」既うイッポリイタはひずひずと興奮して叫んだ。「有つてよ。二本も。」

彼女は二本ともラムブに懸して透して見た。

「出ませう。」

いそいそと出て行かうとする途端に、カンヂアの腹へ突當つた。呀と佇立まつて脹れた塊を見入つた。

「おめでたいわね、巨きな嬰兒さんが生きて。何日なの。」

「左様で御座います、段々近くなつて参りまして。多分今晚あたり……。」

「今夜だつて。」

「已う何だか斯う苦しいやうで……。」

「私を呼びに来れば世話して進げてよ。」

「奈何致しまして、奥様に那樣御面倒掛けましては。母は貴女二十二人も手掛けて居るので御座いますから……。」

七十歳に餘る老女の嫁は、それを算へる爲に隻手の指を五本とも擴げて四通出して、迹は食指と拇指を角のやうにして見せた。

「二十二人もねえ。」と繰返すと同時に微笑の間から綺麗な齒が閃めいた。眼をイッポリイタの腹の邊まで落して行つて、

「奥様の方は奈何遊ばしたので御座います。」

イッポリイタはすると抜け出して梯子段を昇つた。二本の纏を食卓に乗せた。少しの間は放心した體で居た。心もち息迫しさうにも見えた。纏て首を振つて、

「オルトナを御覽なさい。」

祭の市の方へ手を差伸べた。陽氣の風が彼女の足元まで吹いて来るやうに見えた。岡の頂に打廣がる微紅い光は、噴火口とも見擬へられる。その光の中から續けざまに跳立つ無數の煙火の球は、おぼろの碧空に大きな圈を描いて吊下る。譬へばイルミネーションの輝く宏壯な殿堂が海の水に映つた有様である。

「ルクウミの函も開けませうね。」斯う女が言つて居る間に、せつせと纏の口金を剝して居た。

「花や果實や糖果を積上げた食卓の上には夜の蛾が飛んだ。酒の泡は沸騰して卓掛に翻れた。」

「お互ひの幸福を祝してね。」彼女は酒杯を戀人の方へ差出して斯う言つた。

「お互ひの平和の爲に。」と男も酒杯を突出して祝した。

兩つの玻璃杯が憂と音して出合つた機みに、兩方とも破れた。透徹るやうな酒は卓の上に流れて美しい、桃の山に濺つた。

「縁喜が吉い、縁喜が吉い。」とイッポリイタは叫んだ。自分の口へぐうつと飲干したよりも、斯うして跳飛ばした方が面白いと言ふ風で。

そして自分の前に積んだ濡れた桃の上に手を置いた。見事な桃で、片側だけ真紅に色附いて居るのは、樹から生り下つて居るのを見た最後の朝日が、その色に染め做したのかと思へる。唯た今の稀らしい露が復たそれを生返らせたやうにも見えた。

「まあ綺麗なこと。」斯う言つて一番佳いのを一個取つた。露が皮膚の汁を、それを皮を勢かずにばくりと噛んだ。兩方の口尻から流れ出る汁は、黄色い蜂蜜のやうであつた。

「貴郎よ今度は。」
と言つて露の滴る桃を戀人に突出した。丁度初めての日の黄昏に、櫛の

樹の下で麩包の断片を男に與つたと同じやうな身振であつた。

其の追憶が彼に復つて來た。其の話が何となく爲て見たくなつた。「あのそら初めての晩に、お前が焼立ての麩包を喰切つて、そらと言つて尙だ暖い、しつとりした奴を俺に喰はせた事があつたつね。覚えてるだらう。俺には甚麼に旨く思へただらう。」

「覚えてるわ、みんな。那の日の事なら甚麼事も忘れるものですか。」

金雀兒を布いた細徑通り筋に撒いたその清鮮な優美な裝飾、それが心は浮んだ。然うした詩の幻影に吸込まれて、少時は息を濟めて居た。

「金雀兒。」彼女は意ひ掛けない心残りを見せる微笑の間から獨言ちた。

と又續けて、

「すると丘一面が黄色のマントを被たやうで、香氣で眩暈が起きさうだつたわね。」

一寸間を置いて又、

「不思議な花ね。那麼ごしやごしやした棘みたいなもの奈何して如彼華麗に見えたてせう。」

散歩に出ると何處にも此の棘が見られた。長い尖つた莖の先に、白い繊毛で包まれた黒い莢が附着いて居て、孰の莢にも豆があり、青い蟲が蠢んで居た。

「飲まないか。」ジョルジオは新規の酒杯二つに輝く酒を注ぎながら勧めた。「今度の戀の初春のために。」とイッポリイタが祝して、一滴も剩さず飲干した。

透さずジョルジオは復た女の酒杯へ注いだ。

彼女はルクウミの函に指を入れて、

「孰方。黄色いの紅？」

それはアドルフ・オーストルジが送つて呉れた東國の糖菓で、琥珀や薔薇の色を付けて、阿月渾子を雜ぜた軟かい菓子だ。口に入れると、蜜を盛つた肉

の厚い花葩かとも思はれる程香氣が高かつた。

「然う言へばドンファン丸は何處に居るんだかなあ。」とジョルジオは、白い砂糖の膠着いたイッポリイタの指から、菓子を受取つて斯う嘆息した。

遠くの島を思ひ遣る心が、彼に騒立つた。乳香の香の漂ふその島々、そして丁度今頃は夜の歡びを風に乗せて、其の大きな帆を孕ませて居ると想像されるその島々。

イッポリイタはジョルジオの言葉の中に愛惜の心持があることを感附いて、「貴郎は遠くの海でお友達と一緒に船に乗つてる方が、此處で私と二人限りて居るよりは好きなのね。」

「此處も厭だし船も厭だ。全て別な處でなくつちや。」拗ねるやうな調子で答へて笑つた。

そして衝と起つて行つて、唇を戀人の方へ突出した。

女はねちねちとした頬張つた菓子砂糖だらけな口で、思ひきり彼に接

吻した。——その周囲を蛾が飛廻つた。

「お前飲まないね。」接吻の後で、少し變つた聲で言つた。

彼女は猶豫なしに酒杯を空けた。

「ほう、暖いこと。」と飲んで了つて、「貴郎、ネチアスのダニエリのスナップキ（凍結したシャンパン酒）御存じね。私那の薄くちらちら落ちる處大好きよ。」自分の好きな物や氣に入つた所作などの話をする時の聲には、特有の豊艶があつた。そして綴音を手繰り出す時の唇の運動には、深い肉感の色があつた。て、その一つの語にも、一つの運動にも、ジェルジオは極々鋭い苦悶の種を見出した。此の肉感、最初はジェルジオの方から彼女に嘘込んだものだ。それが却つて、夥しい猛烈な欲望となつて、甚麽牽掣にも反抗し、咄嗟の満足を幾度でも強請ひ程になつて來たやうに見える。男無しには一時も居られないやうに見える。必ずしも必要でない歡樂が、是非無くてはならないらしい。奈何いふ種類でも、奈何いふ等級でも、歡樂とさへ言へば矢も

楯も堪らずそれに耽らうとする女のやうになつて來た。ジェルジオが居なくなるか、彼女が此の戀に疲れるかしたたら、旨い確かな條件なら必と喜んで引受けるだらう。其の値段も、うまうまと思ひきり、高く糶上げるかも知れない。實を言へば、肉欲の道具として、是程稀らしい女——縦しその代價は貴くとも——が何處にあらう。今では有らゆる誘惑と有らゆる手練とを、彼女は心得て居る。彼女の美は通りすがりにも男子を打僵し、氣を顛倒させ、制へ難い食欲を血の中に注ぐ。猫のやうに纖柔な體附き、化粧に就いての洗練された趣味、衣服色彩に就いての卓越した技巧、いづれも彼女の美と調和せぬものはない。眼が天鵝絨のやうなら、聲も同じく柔かて、緩乎、緩乎と言葉を手繰り出す工合は、人の夢を誘ひ、痛みを慰さずには置かない。彼女の體内に潜む、或る病は、時々不思議に神経を輝かすらしい。可憐しい病衰と、激烈な強健とが交替りに起つて來る。何と言つたところで、彼女は石女だ。——これで見ると、不淨の美の筈を握つて世界を支配せよと命

せられた女子達の特質といふ特質は悉く此の女に集まつて居る。それに此の女のパッションが手傳つて其の特質は一層鋭く且複雑になつて來た。彼女の力は今は既に頂點に達した。若し忽ち一切の羈絆から解放されたならば、奈何いふ生活の道を彼女は擇ぶだらうか。ジョルジオは何等の疑ひもなく、十分に其の方嚮を知つて居た。彼が確かめた所に據ると、女に及ぼした自分の感化は、唯單に感覺の事物若しくは、取つて附けたやうな精神状態だけに過ぎなかつた。下民の本性は深く土臺を固めて動かす術もない。然うした土臺がある以上、肉體にも精神にも何等の卓越の無い戀人——詰り平々凡々の戀人——に近づいて容易に同化されることは疑ひを容れない。そして彼は、女の好きな酒を復た酌して遣りながら、——其酒は水入らずの會食を浮立たせるため、秘密な近代式の小宴を賑はすために用ひられる酒でもある——想像の裡で……肩を並べる者もない蒼白い淫縱な羅馬女の上に、過度な放逸を眺めて居た。

「まあ手が顫へて。」彼を打目成りながら斯う言つた。
「然うだらう。」可憐しさを掩して故と快活に、「既う屈つたんだよ。お前些とも飲らないぢやないか。何だ猪いぞ。」
はい、と女は笑つて三杯目も干した。追附け酔が廻るだらう頭がだんだん懵乎して來るだらうと考へて、子供らしく嬉しがつて居る。既う酒氣は彼女に活き掛けた。「ヒステリックな悪魔は彼女を唆す手配を爲出した。」「見て下さい、這麼に腕が動くなつて。」彼女は白い闊い袖を臂まで捲し上げて、調子高に斯う言つた。「でも手頸だけはねえ。」
女の肌の色は温かな、燦んだ黄金のやうな暗色だが、手頸の皮膚の色ばかりは非常に綺麗で、明るく、不思議な蒼白さを持つて居た。日の當る部分は焦げたけれど、手頸の裏の方は白い儘で居る。その綺麗な、蒼白い皮膚を透して、動もするとオレットに近い濃い藍の織いけれど、眼には見える血管が透徹した。ジョルジオは、伊太利亞の使者に向つてクレオパトラの言つた語を

幾度も考へて居た——殊に青き血管に接吻せむとならば、此處にこそ。」
 ナイフは両方の手頸を突出して、
 「接吻して。」
 彼は片方を緊く握つた。そしてナイフを取つて脈を切るといふ身構へをした。
 「切るなら切つて御覽。」故と挑むやうに、「動きやしないから。」
 彼はその身構へて女の皮膚の美しい青い羅紋を屹と見た。如何にも明
 くて外の女——明色の女の皮膚としか思へない。て此の矛盾が彼を擒へ、
 美の誘惑を彼に與へ、美の悲劇の幻影を見せた。
 「此處が灸所だな。」莞爾と、「是が何よりの證據だ。お前必と脈を切られ
 て死ぬよ。どれ那裏の手は。」
 両方の手頸を一緒にして復た一撃に切落すやうな身構へをした。彼の
 心の裡にその幻像が隈なく現れた——陰影の深い底氣味の悪い扉口の大

理石造りの闕の上に、死んで行く女が腕を投出して居る。と其の端の方の
 切斷された血管から、二つの真紅な泉がどくどく噴出して居る。その紅い
 泉と泉に挾まれた顔の上へ、此の世ならぬ蒼白さが徐々に落ちて来る。眼
 窩に限りなき神祕が漲つた。言ひたくても言へない言葉の影法師が結ん
 だ口の上に描き出されて居る。偶とその泉が二つともばつたりと息んだ。
 血の氣の失せた死體は、黒闇の中へ物凄いな音を立てて後ざまにそつくり反
 つた。
 「貴郎のその夢を聴かして頂戴な。」思ひに耽る男を見て訊いた。
 彼は其の夢物語を彼女に話し聴かせた。
 「まあ綺麗ね。」まるで繪巻物でも見て居るやうに讚嘆した。
 彼女は捲煙草に火を點けた。蛾の飛交ふラムズを目蒐けて煙の波を噴
 掛けた。少時は薄い煙の面紗を透して、小さい染別けの羽の波に揺られる態
 を眺め入つた。偶と又火花の飛ぶオルトナの方を顧眄つた。起上つて眼

を星に注いだ。

「なんて暖い晩ね。」呻と深く呼吸をして、「貴郎暑かなくつて。」
捲煙草を打棄てた。復た自分の腕を捲つた。男の傍へ寄つた。急に男
の首を後から取つて壓へて、長いこと媚愛に包んだ。可憐しく燃えるやう
な口は、男の顔中に幾つとも知れない接吻を浴せて廻つた。猫のやうに純
り著いたり取著いたりした。形容の出来ない、――軽捷な隠密な身振をし
て、男の膝の上に乗りに来た。その軽い衣の上からは……膚の匂も感じら
れる。此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

「お廢しよ。お廢しよ。」彼は女を押し除けつつ咬いた。「他が見るから。」
女は其處を離れた。足元が少し躊躇して居る。如何にも酔つたらしい。
眼の上にも頭の中にも霧が懸つて、視力と腦力とを曇らせたやうだ。
「暑いわ。」熱る額や頬の上に手を當てて、「裸體で居ても可いくらゐよ。」

ジョルジオは唯那の一念に吸込まれて、「俺一人て死ななければならぬ
んだらうか。」を繰返して居た。段々時間が経つ丈、それだけ暴行の切迫が
感じられて来た。背後の寢室に時計のさちさち刻む音がする。遠くの方
では芋を打つ音が断續して聞かれた。此の二つの異つた物音に、時間の逃
亡といふ感じが鋭くなつて、何となく慌忙しい恐怖を受けた。

「あのオルトナの煙火を御覽なさい。」大きな聲して、イッポリタは祭の市
を指した。今しも天を焦して居る。「あれあれ。」
中央の一點から打上る無数の煙火は、中空に擴つて幅廣な黄金の扇とな
る。それが見る間に碎けて金砂子の雨を降らす。と忽ちその雨の真中に、
復た新らしい扇が颯と見事に擴がつて復た碎けては復た戻る。その變化
の態を水が逐一反映して居た。小銃の斜ぐいふやうな音が遠くから聞え
る。其の間を縫つて一段高い空際で、段段色の球の罅裂ける重々しい音が
響いた。響きのする度毎に市も港も突堤も五色の光に照らされて夢想郷

の面影を見せた。

胸壁に對して眞直に立つたイッポリイタは、驚嘆の眼で此の光景を眺め、歡喜の聲を揚げて輝きまざる美觀を祝した。時とするを彼女の白い體の上に炎の反射が擴がった。

「大分興奮してる。酔も廻つたやうだ。甚麼突飛な事でも爲兼ねない。」

ジョルジオは彼女を見ながら然う思つた。「毎もしたがつてる散歩を彼女に勸めて炬火で照らして軌方かの隧道を抜けるやうにさせることが出来る。炬火はトラボッコオへ行つて取ることにする。女は橋の袂で待たせて置く。其處から那の細徑を傳はつて隧道の方へ連れて行かう。汽車が隧道の中の吾々を轢殺すと言つた手順に：不注意からの災難。」

此の計畫は實行するに難かしくもなさうに見えた。此の計畫が著しく鮮明に浮んで來たのは、龔日初めて磨光る軌道の前で、打亂れた心の閃きを感じてから、今日迄意識の下に根を張つて居たものと見える。「死ぬなら

一緒だ。」といふ決心は固まつて動かなくなつた。背後の時計の刻む音を聽けば氣が苛立つて制へられない。時間は確かに迫つて居る。降りて行く女の時間もむづかしい。猶豫なく決行しなければならぬ。速く確かな時間を知らなければならぬ。併し彼は席を起つ事も出来ないらしい。無食着て居る女に物を言はうとしても、逆も聲が突掛つて出なからう。

ぐわうといふ地響が聞えると彼は起上つた。「遅れた！」といふと同時に鏡く血が鳴つて悶え死ぬかの感じがした。その間に轟といふ音、ひゆうひゆういふ音が近づいた。

「汽車ね。」イッポリイタは願つて、「來て御覽なさい。」

彼は近寄つた。女は露出した腕で彼の頸を纏いて、その肩に靠れた。「隧道へ這入るわ。」音が變つたので斯う言つた。

ジョルジオの耳にはその響きが可怕しい勢で高まつた。彼の眼は幻覺を起したやうに、暗い穹窿の下に自分も女も立つて居る所を見た。火燈が闇

中へ突進する軌道の上でちよつと揉合つて二人が共仆れになる。身體は物凄まじく轢切られる。その瞬間にも生々した媚びまざる女との接觸を感じた。彼女は何處までも勝利者である。斯ういふ可憐しい破滅に對する肉體の恐怖と、逃出さうとする女に向つての激しい怨恨とが結び附いて感じられた。

二人は胸壁の上から轟々と速く憎さ氣に駆けて行く汽車を眺めた。地盤から家を撼つて彼等をまて震はせた。

「夜など家を撼つて通られると私消入るやうに思つてよ。」段々男の傍へ寄つて、「貴郎は何ともない？　でも折々震へて居らつしやるわ……。」

彼は女の言葉を聽いては居なかつた。心の中には大きな動盪があつた。斯うした物狂はしい、隱密な興奮が彼の精神に萌したといふことは、曾て無かつたことである。滅裂な考想や幻像は、腦天に渦を卷いて居る。心臓は幾百千の突創を受けて轉轉つて居る。然う言ふ中ても一つの鮮かな幻像

が、他のすべてのものを壓倒して、忽ちの内に心の中央を占領した。——彼は五年前の此の時刻に何をして居たか。或る死體の夜伽をして居た。見張つて居たのは黒の面帕に覆はれた顔、細長い蒼白い手……。

イッポリイタの手は氣榮りさうに彼を撫てたり、頭髪を弄つたり、頸を揉つたりして居た。彼の頸にも耳にも生温かい吸角のやうな唇が感じられた。制へられない本能から、彼は女を振放して逃げた。女は反語的な包ましからぬ一種の哄笑をした。男に刎附けられた時に此の哄笑が極まつて破裂して齒の間から響けた。斯う纏綿はれる間から、緩徐な、透明な綴音が聞かれた——「接吻されるのが煩いからだわ。」

小銃の剝々いふやうな音が明かな重々しい音に混つて祭の市から尙だ聞えて来る。復た煙火が始まつたのだ。イッポリイタはその方へ向返つた。「まあ、オルトナは火事のやうね。」

廣大な眞紅の炎は、空一面に擴がつて水に反映した。その眞中に燃立つ

市の輪廓が隈取られた。煙火は電光のやうに絶間なく打上る。火の球は華麗な大輪の薔薇のやうに裂けた。

「今夜も此の儘過すのか。」とジョルジオは自分に問うた。「明日また斯うして生活を始めるのか。それが何時までだ。」嘔逆く程苦しい不快狂暴に近い憎悪が彼の體の奥底から湧いて來た。——聽て近づく夜も、同じ牀に此の女を引附けて置かなければならぬ。眠つて行く女の呼吸を依然聽いて居なければならぬ。熱る皮膚に近寄つてその匂を嗅がなければならぬ。聽て同じやうな朝が明けて、毎もの通りの倦怠の裡に流れ去つて、何時迄經つても交替りに攻立てる煩惱の歌ひ間もない……。」

一段華やかな光が彼を驚かして、外の光景に彼の視線を引寄せた。満月のやうな大薔薇が祭の市の空に開いた。下の海岸には眼の遠く限り、小さい新月形の入江や尖つた山の鼻などまでが光を浴びた。モロ岬、ニッキオオラ、トラポッコオ、遠くはグストオの海角まで點々と見える岩礁皆一時は一面の

光芒の裡に照らし出された。

「那の岬。」斯う秘密の聲が唐突に竊とジョルジオに囁いた。すると彼の視線は不態な幹の橄欖を戴いた岬の絶頂へ運ばれた。

白光はおのづから消えて行つた。遠方の市はイルミネーションの爲に間にも瞭然形を残した儘沈黙した。其の沈黙の裡にジョルジオは復た時計の音と芋打つ音を耳にした。けれども今度は苛立つ心を支配することが出來た。自分でも前よりは氣が確かに明るくなつたことを知つた。

「少し出て見ようぢやないか。」とイッポリイタに尋ねて見た聲は、餘り變つて居るやうでもなかつた。「戶外へ出て草の上にも轉がつて、爽々した空氣を吸つて來よう。今夜は何だか月夜のやうに明るい。」

「厭や厭や。」とイッポリイタは億劫さうに、「此の儘で澤山。」

「未だ早いんだ。もう眠いのか。俺は、知つてる通り、餘り早くは寝られな

い方だ。眠るところでなくつて、苦しむ許りなんだ……。少し散歩させて呉

れると可いんだがなあ。出掛けて見ようぢやないか情けてないで。其の儘で可いから。疲れる事などあるものか。」

「厭あよ。此處に居ませうよ。」

彼女は溶けさうな媚びるやうな風で復た男の頸に白い腕を纏繞けた。

「此處に居ませうよ。一緒に行つても寝みなさいな。」男が反抗すればする程餘計放しともなくなつて強ひて媚びて引留めようとした。「さあ來らつしやい。」

彼女は熱情と美との化身と見えて來た。其の美は燄のやうに燃えた。

俏身な蛇のやうな體は、著物の綾目を透して顫へた。盱然と黒い眼には情の昇り詰めた時に見せる魅惑の力を湛へた。彼女は至高の淫縱そのものであつた。「それが繰返す言葉は——私は何時迄経つても不敵です……。私の方が貴郎のお考想よりは餘程強い……。肌の匂だけでも、一つの世界を貴郎の内に溶かして見せる力がありますよ。」

「厭だ、寝たかない。」制へられない亂暴に近い決心から、緊と女の手を握つて拒否けた。

「まあ。寝たかないつて。」彼女は鸚鵡返しに斯う答へた。勝利の知れた此の押問答が面白くもあり、且此の場合の僻氣を思ひ止ることも出来なかつた。

彼は餘りの唐突を悔いた。女を毘に陥めるには、手柔かに機嫌を取つてかからなければならぬ。優しい心持を伴装しなければならぬ。然うすれば必と夜の散歩——最後の散歩に彼女を連出すことが出来るに極まつて居る。がそれと同時に眼前の決行になくはならぬ刹那の神經の興奮が、彼女との抱擁の間に消えて了ふだらうと思ふことは何よりも辛い。

「まあ。寝たかないつて。」と復た女が繰返して、男に纏繞いて、猛威を隠したやうな風で、男の眼の底までを見込んだ。

ジョルジオは女に曳摺られてつい室の内へ這入つた。

それから後、猫のやうな「讎敵」は、既う對手を征服した氣になつた。彼の武裝を解かせ、神経を鎮め、害心を棄てさせるやうにしなければならぬといふことを知つたらしい。

ジェルジオは一切が休したやうに感じた。

其の時女は突然、神経的に笑ひ出した。激烈で制へられない狂人のやうな物凄い哄笑であつた。彼は驚いて手を弛めた。然も吃驚したやうに女を眺めて、心の裡で、「氣が狂つたのぢやないか知ら。」

あは、あは、あは、と身悶えしたり、顔を手で掩うたり、指を噛んだり、脇腹を抱へたりして笑つた。長い、強い吃逆に揉まれながら、方圓もなくあはは、あは、と笑ひ立てた。

折には些と止ることもあつたが、總て復た前よりも劇しく笑ひ出す。深

夜の静寂の裡に斯ういふ狂人めいた哄笑程、凄いものはない。

「心配しないで下さい。心配しないで下さい。」哄笑の止つた間に、呆れて居る男を見て斯う言つた。「もう癒ります。那裏へ行つて頂戴な、お願いだから。」

彼は夢心地で涼廊へ出た。それでも頭腦の中は不思議に牙々しく澄切つて居る。自分の爲た事や感じた事は、總べて彼には非現實な夢と思へたと同時に、譬喩に似た深い意味を有つた。背後に哄笑は尙だ聞えて居るが、強ひて制へて居るらしい。頭上にも身の周圍にも夏の夜の美が見られた。今こそ最後を見るべき時刻となつた。

哄笑は確と歌んだ。復た静寂の裡から時計の音と葶打つ音とが聞え出した。偶と老人達の家の方から来る微かな呻きに、彼は慄然となつた。——

「一切が終局を告げなければならぬ。」と考へた。振返つて確とした足取

て鬨を跨いだ。

イッポリイタは服装を整へて蒼い顔をして、眼は瞑り掛けた儘褥倚に長くなつて居た。それと見て婿としながら、

「お掛けなさい。」と煮切らない身振で囁いた。

女の上に顔を寄せて見ると、睫が涙に濡れて居る。傍に腰を卸して、訊いて見る。

「苦しいのか。」

「少し胸が苦しいの。何だか瘞見たいなものが、此處のところを上つたり下つたり……。」

と言つて胸の中央と思ふ處を指した。

「斯う閉込んで置いちや苦しい譯だ。何爲元氣を出して外へ出て見ない。空氣に當てると快くなるよ。今夜は格別良い晩だ。奈何だひとつ。」

自分から起上つて手を女に渡した。女も手を出して引張らせた。立つ

たと思ふと頭を揺つて尙だ捌いた儘の髪を背後へばらりと投返した。それから身を屈めて倚子の邊に簪を探した。

「奈何したんだらう。」

「何を捜してゐるんだ。」

「簪。」

「いいさ。明日になれや分る。」

「だつて簪無しぢやあ髪が結へないもの。」

「それが可いんだ。その方が好きだ。」

彼女は莞爾した。二人は涼廊へ出た。女は顔を星に仰向けて夜氣を吸込んだ。

「良い晩だらう。」此のジェルジオの聲は囁かれては居たが染々とさせた。

「芋打つてるのね。」絶間無い節奏に耳引立ててイッポリイタが言つた。

「降りよう。」ジェルジオが言ふ。「少し散歩しよう。那の橄欖の樹の邊まで

行かうぢやないか。』

彼は女の返辭に對して固唾を呑んだ。

『厭あよ……此處に居ませうよ。這麼恰好してるぢやありませんか。』

『構ふもんか。誰が見るものか。今頃誰にも出會す氣づかひはない。その儘で行かう。俺も此の儘だ、帽子も被らない……。此處等は自宅の庭見たいなものさ。降りよう。』

彼女は些と躊躇した。が自分でも空氣を變へて見たくなり、先刻の自分の物凄しい哄笑が尙だ反響して居さうな家から遠ざかつて見たくもなつて來た。

『行つてよ。』彼女は同意した。

それを聞いたゾルジオの胸は鼓動が止つたやうに思はれた。

我にもあらず燈火の點いた室の口まで寄つた。可惱しさうな視線を室の中に投げた——暇乞の瞥見である。種々な追憶が一度に渦を捲上げて

暈旋しかけた。

『ラムプは此の儘にして置かうか。』と訊いた意味は自分でも考へて居なかつた。その自分の聲が遠い、聽き知らぬ聲のやうに響いて、何とも形容の出來ない感じがした。

『えい。』とイッポリイタが答へた。

二人は降りた。

梯子段に掛ると互ひに手を執合つて、一段一段と緩やかに足を運んだ。切ない心を押隠す努力の激しさに却つて異様な心悸きが起つて來た。夜の空の「無限」に想ひ到ると共に己自身の緊張した生命で、此の空を埋めたやうな氣分になつた。

庭の胸壁の處に誰だか黒い人影が静と音立てずに居る。爺やといふことが分つた。

『爺や、今頃奈何して。』とイッポリイタが呼掛けた。『眠られないの？』

「娘がお前様蟲い冠つたて夜伽しとりますだ。」と老爺が答へた。

「機嫌良くつて。」

「良えてがんです。」

家の扉口には赫々と燈火が差して居る。

「貴郎一寸待つてね。カンヂアを見て来るから。」

「お廢し。今行つちや不可い。歸途にした方が可い。」と頼むやうに。

「然うね。歸途にしよう。爺や左様なら。」

細徑を降りて行かうとして彼女は足を滑らした。

「お氣を附けなさいやし。」老爺の影法師が注意した。

ジョルジオは手を貸して、

「捉まつて。」

彼女は男の腕の下に手を廻した。

良久は黙つて歩いた。

可輝しい夜は、持前の有らゆる美の装ひに飾られた。大熊星座が七重の
祕密を藏して二人の頭上に輝いて居る。空と一つに音も無い清澄なアド
リアチコは、纒かに呼吸と薫じとて、それが海であることを知らせて居る。

「那樣に貴郎急がなくなつたつて。」とイッポリイタが責めた。

ジョルジオは歩を緩くした。唯一念に支配せられ、決行の必要に驅られた
彼は、その他の事物に就いては、漠とした意識しか持たなかつた。彼の内部
生活は、衝突し崩解して、一種の陰密な醜態を起し、一方では彼の眞底まで潛
り込むと同時に、表面へは、同じ人の生活中の現象とも思はれぬ位異なつた
種類の断片を切々に持出した。斯うした奇異な執拗い暴れ狂ふやうな事
物に對する彼の眼は、夢を見るやうに朦朧として居た。それにも關らず頭
腦の中の或る一點だけは始終際立つて透徹つて居て、睨りした一條の道を
指示しながら、彼を最後の行爲まで案内した。

「何て那の苧打場の音が陰氣でせう。」イッポリイタは歩いてもなしに斯う

言つた。「終宵打つてるのね。貴郎は別に悲しくは感じない？」
彼女は男の腕に身を委せて髪を男の頬に擦り附けた。
『あのほらアルバノの時に終日窓の下で石切屋が登石を敲いて居たの記
えてて。』

其の聲は悲みに包まれて居た。少し疲れても居た。

『那の音を聴いてると眠くなるやうだつたわね。』

心元なさうに言葉を送切らして、

『何爲そこいらを胸して許り居るのよ。』

『誰だか跳足で跟いて来るやうな気がする。』ジョルジオが低聲に答へた。

そして頭髮の根が鈍痒いやうな感じがした。「待つて見よう。」

二人は佇立つて耳を澄した。

ジョルジオは以前那のトラジクな室の扉の前で、身内の凍るやうに感じた
その同じ恐怖の領内に這入つた。彼は最早不可知な世界の障壁を乗越え

たと信じて、神祕の誘惑に打顔へた。

『ジョルヂイノだわ。』近寄る犬を見附けてイッポリイタが言つた。「追掛けて
來たのね。」

彼女は二三度その忠實な犬を呼んだ。犬は勇んで駈けて來た。彼女は
身を屈めて犬を撫廻した。

『お友達を忘れないで居るのね。ね、然うだらう。』斯う彼女が犬に話した
調子には可愛く思ふ動物に向つた時に使ふ特別の響きがあつた。「然うだ
わね。忘れやしないわね、何時までだつて……。」

犬は喜んで沙の中を轉げ廻つた。
ジョルジオは二三歩進んだ。イッポリイタの腕を離れたと思ふことは、非常
な息休めてあつた。此の時まで彼女の身に觸れて居たのは、容易ならぬ
苦痛の種であつた。彼は咄嗟に結了せられようとする手荒な舉動を描い
て見た。此の女の身體を自分自身の兩腕で可厭といふ程抱締めた處をも

描いて見た。そして出来る事なら最後の瞬間まで彼女の身に觸らずに居たかつた。

「さあ歩かう。もう直ぐだ。」星明りに白んで見える橄欖の方へ導びいて行つた。

廣場の終端で偶と佇止つて女が跟いて来るかを確かめた。もう一度喪神したやうな眼附で周圍を陶したのは夜の像を抱込まうとする者のやうであつた。此の廣場に限つて格別沈黙が深いやうな氣がした。遠くの小舎で芋打つ音許りが聞えて居る。

「さあおい。」急に力の這入つた澄んだ聲で繰返した。

そして不態な樹幹の間を潛つて足の底に快い草を踐んで崖の方へと指して行つた。

崖の端は圓く出張つて四方には圍ひがない。其處から兩手を膝に突張つて怕々首を出して下を見込んだ。眼の下には多くの岩と沙濱の一隅と

が見られた。沙礫の上に投り出された子供の死體が、瞥と心の眼に映じた。ビンチオ公園の高處から、イッポリータと一緒に壁の裾の甃石の上に見た黒い斑點も記憶に甦つた。那の蒼ずんだ顔の男に答へた馬丁の言葉も耳に這入つた。同時に、それ程遠い前の午後の追憶が紛糾つて彼の精神の上を通つて行つた。

「危いわ。」イッポリータが追掛けて来て、「危いわ、貴郎。」

犬は橄欖の樹の間で咆えた。

「ねえ貴郎。這箇へ來らつしやいよ。」

崖は眼の下の黒く凄い岩の處まで削ぎ落したやうになつて居る。岩の周圍の水は微かな音を立てて蠢めいて柔かに星の影を慰して居る。

「貴郎、貴郎つてば。」

「大丈夫さ。」と彼は暖れた聲で答へた。「來て御覽よ。おい。岩の間で漁夫が火を焚いて魚を取つてるよ……。」

「厭よ、厭よ。眩暈が可怕い。」

「大丈夫だ。緊乎捉へてるから。」

「厭だ、厭だ……。」

彼女はジョルジオの聲の何時に無く異つた調子を怪んで、一種の駭きに擒はれた。

「可いから来てつてのに。」

言ひつつ両手を擴げて女に近寄つて來た。手捷く女の手頸を引摺んで二三歩引戻した。纏て翻りを附けて淵の角まで突出さうとした。

「いや、いや、いや……。」

女は狂ひ力を出して角力つた。幾と體を振挽つて背後へ跳退つて息をはずませながら慄然顛へて居る。

「貴郎氣でも狂つたの。」忿怒が吭元へ込上げて高聲に、「氣でも狂つたんぢやないの。」

併し男が物も言はずに復た儼々と寄つて來た時、一倍荒々しく捉つて崖の方へ曳摺られたと思つた時には、彼女は不吉の光に照らされたやうに一切を了解した。彼女の靈は恐怖の爲に爆ぜ裂けた。

「可厭可厭。貴郎、放して、放して。一寸で可いから、聽いて下さい、一寸、言ひたい事があるから……。」

可怕さに氣を取亂して身悶えしながら男に懇へた。思ひ止らせるには、不惑の情を起させる外はない。

「一分の間です。聽いて下さいね。私貴郎を愛してよ。だから堪忍して項戴な。ねえ貴郎。」

絶望の語が後先なしに突走つた。氣が痿えて、足場を失つて、びたりと死に出會したやうな感じがした。

「人殺し！」銷魂しくその時に女が悲鳴した。
そして野獸のやうに爪と齒を使つて身を軋いだ。

「人殺し。」斯う叫んだ時は既う頭髪を引捉へられて崖の鼻へ撲倒されて、
最期まで来たやうな気がした。

犬は此の一團の人影に咆立てた。

其處に簡單なと言へ激烈な闘ひがあつた。此の刹那迄心の奥に無上の憎悪を醸して居た、相容れない讎敵と讎敵との間の闘ひのやうなものであつた。

斯うして二人は組合つた儘死の中へ跳り入つた。

(終)

目次

一 過去……………	一頁
二 父の家……………	一二九
三 隱栖……………	二八九
四 新生……………	三八一
五 破壊の時……………	五六七
六 不可抗力……………	七〇一

大正二年九月一日印刷
大正二年九月四日發行

死の勝利與附
定價 金壹圓八拾錢

著者 石川 戲庵



發行所印

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
右代表者
事務取締役 宮川 保全

發行所

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替口座 東京 二一九番

森鷗外氏序 島崎藤村氏跋
上田敏氏序 小杉未醒氏畫

好評・洵・沸・訂・正・第七版
菊版貳冊 洋裝紙 總紙數
拾面 七百頁 全頁大插畫五
地圖補遺註解等附
定價 各金壹圓五拾錢
郵送料 各金拾貳錢

石川川庵 譯
佛文完譯

ソルトツ 懺悔錄

西歐中世の全思想を轉振したる偉人ルツオは、大正新代の黎明に復活して此の懺悔錄の翻譯となり、讀書界は有らゆる最高級の讚辭を雨下して此の「創造の人」と「永遠の書」とを歓迎せり。人生問題自我問題の洵湧する今日、氣運の然らしむる所なるべしと雖も、本書の深き同情と理解との下に譯出せられたる功績を没すべからず、今や本文を訂正し挿畫を増加し更に面目を一新して第七版を刷出し、極度の廉價を以て發賣す。斯かる庖然たる大冊にして増版の頻りなる出版界稀有の現象に屬す世の疑ひ惱み迷ひ苦める人よ、各個獨自の新境地を拓かんとするに當りて廢れたる道德以外亡びたる宗教以外に其の努力を養ふべきもの此の靈泉と聖樂とを描きて亦何をか借らん。

●大阪毎日新聞 上下兩卷無慮千五百頁の大冊が、まほまほに歓迎せられたといふ事は、讀書界の氣運を卜するに徴候

てがなあらう。つまり近代的思想、近代的生活の第一人は彼を除いて他にその人が無い。上田敏氏の序文に「智識よりも行爲よりも奥深く潜んでゐる生命の叫び」といふ文字を使つてゐるが、この生命の力こそは、ゲエテを動かした、フロウベールを動かした、トルストイを動かした、すべての近代人の内部に共鳴を起させた自由思想の源泉である。「懺悔錄」には、ルツオ自身の何一つ隠さうとしない、露出した靈魂が動いてゐる。それを明白に見るには、やがてまた讀者が自分の欺らない姿を見ることが出来る。吾々は「懺悔錄」を讀む事によつて初めて安心が得られる。吾々は人間である、そして他の何物でもないといふ事を知るのは、此の上もない慰藉であり、また力である。吾々がルツオの心持に返つて、新しく生活の道が通れたら、それこそ初めて後悔を伴はない月日を送る事が出来るやうといふものだ。ワレンス夫人の如きはルツオが情緒の源泉であるだけに、所謂永久の女性の姿をもつて現はれてゐる。ルツオのワレンス夫人に對する愛情は形においてロマンチックなところはあるが、その心持においては寧ろ人間靈魂の永久の隠れ家である。「懺悔錄」に現はれた石川川庵氏の譯文は透明な鏡みのある、どこまでも行き届いたものだ。氏のダマシオなどの翻譯に見えた絢爛な詞藻に比べると殆ど別手の感がある。(節略)

●帝國文學 ルツオは近代思想の根柢で、彼が「懺悔錄」は實にその結晶である。在るが儘の告白、文藝の野を越つてゆく音楽の調、理智にのみ走らない情感の心、絶えず動き絶えず進む勇猛心、凡そかういふ近代的の要素はルツオを知らなければ、ルツオのこの一書を知らなければ、根本的に解することは出来ないものである。本書の斷片的な一部譯は今迄に二三あつたが、完全譯はこれが始めての出現で、讀書界は多年の渴をここに醫することが出来たものである。本書を完全譯と云ふのは、ただに全部即ち前篇後篇一千七百頁に渉る翻譯といふ意味ばかりではなく、著作が施した懇切な注釋と、數十葉の得難い肖像畫及寫眞版と、精密な地圖と、斯くの如きものを引きくるめて云ふのである。ことに譯文のすらすらと極めて解しよくなだらかによどみのない事と、文法の確かさを持つてゐる事と、假名をふつてある事とは、この譯書の價値を更に重からしめるのに與つて力あるものである。出版界が今日のやうに亂調に、無益な書籍の出現の多い時に當つて本書の如き「永遠の書」を得たことは實に心強い限りである。讀者はこの自叙傳たる小説を讀んで、そこに始めて自己の影を見出し、ひいて近代文明の特性を闡明することが出来るであらうと思ふ。本書は實に人間、「現代に生きてゐる人間」の何人も讀まなければならぬ書である。製本露酒、價甚だ廉である。

●島崎藤村氏談(新潮) 人には、言ひたいことが心に一ぱい溢れて居るやうに、それを書いたり言つたりするやうに纏つて來ないやうな場合がある。さう云ふ時期に、私の心を纏めてくれたものはルツオの「コンフェッション」であつた。あの書は、物の觀方、考へ方と云ふやうなものを教へてくれた。纏りの附かない心を、纏めてくれた。是非讀んで御覽なさい。あの本を讀むと決して二百年前の人の書いたものを讀んで居るやうな氣はしません。全て、我々と同じ人間と向ひ合つて話して居るやうな氣がします。ルツオは少年時代の希望を述べて、町へ出て別荘でもあるやうな一寸した家の召使になつて、其所に美しいお嬢さんがあるとして其戀人になることであつたと云つて居る。誰でもさう云ふことを希望する時代があるものと見えますな。

發行所

東京市京橋區銀座壹丁目
振替口座東京二一九番

大日本圖書株式會社

文士學淺野和郎 文士學三保
 沙翁全集 (刊既)

ハム レツ ト	ロ メ オ	ヴ エ ニ ス の 商 人	オ セ ロ	リ ア 王	か ら 騒 ぎ	シ ー ザ ー	御 意 の ま ま	行 違 物 語	十 二 夜
全一冊	全一冊	全二冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
郵定 税金 八拾 五錢	郵定 税金 八拾 錢	郵定 税金 八拾 錢	郵定 税金 八拾 五錢	郵定 税金 八拾 五錢	郵定 税金 八拾 五錢	郵定 税金 九拾 錢	郵定 税金 九拾 錢	郵定 税金 七拾 五錢	郵定 税金 八拾 錢

書評

大日本圖書株式會社

329
186

1132

終